

公募観察会

～足で知る宮島学シリーズ～

新宮島八景「博打尾」と植物観察会

日時 平成 23 年 11 月 20 日 (日) 9:00~14:00

天候 くもり

参加者 大西 小方ペア 川崎 北野
小林(勗) 坂本 佐藤(佐) 佐藤(庸) 島
富田 中道 野呂田 舛田 丸平 村上
横路 大高下 A R

一般参加者 28 名

週末になると雨の天気が続いていたこのところ、前日の雨は上がったものの朝から冷え込み、時折強い風が吹く。参加者は徒歩またはバスなどで三々五々「包ヶ浦公園」に集まり、9時から受付を開始。開会式では、今年は暖かく蜂や毒蛇もまだ活動しているので参加者に注意を促した。28名の一般参加者は、紅葉シーズンとあって期待も充分、4班に分かれて元気に出発した。

まずは、汽水池の“シバナ”の保護状況の観察。金網の中のシバナは、穂先に沢山の種を付けていて個体数は増えていると思われる。ただ、鹿や野鳥の食害に会っており、継続した保護活動が必要だ。

いよいよ、登山道に差しかかる。シロダモやカナメモチ(アカメモチ)の赤い実、ヒサカキやシャシャンボの黒紫色の実、ヤブムラサキの鮮やかな紫色の実と木々の果実が目を引き。コジイやウラジロガシ、アラカシの大



木が原生林の様相を呈している森では、参加者が大樹の幹に手を当てて樹の命を確かめている。尾根近くで展望が開け、近く遠くに瀬戸内海の島々が見渡せる。トキワガキの葉の間に、小さな未だ緑色の実が数個見える。明

るい陽射しの尾根道の傍らのヒサカキの枝に“ヒノキバヤドリギ”が着生。間近に見ることが出来るので、参加者も珍しそうに見入っていた。

クロバイやタイミンタチバナなどを観察しながら、元就の軍勢が嵐の闇夜を突いて進んだであろう山道を「博打尾」へと向かう。



12時に到着。少し冷たい風を避けながら昼食をとる。昼食後、小林観察部会長による『厳島合戦』の紙芝居、登場人物の人物像や陶軍側から見た時代背景など、資料写真を使った新しい解説は、一味違った大人の紙芝居。参加者には大変好評であった。

午後は、ミヤジマママコナや向かいの山の斜面の真っ赤に紅葉したヤマハゼなどを見ながら紅葉谷公園へ向かう。14時に到着。

今年は気候が暖かいせいか、紅葉の鮮やかさが今ひとつと感じられたが、秋の一日を楽しく過ごした観察会であった。(横路 晃)

植物マップの改訂版

平成 14 年に発行した「弥山原始林の植物マップ」は平成 17 年の台風災害で登山道が大きく変更になっており、その後の調査で判明したものを加え、全面的に見直し、改訂版を発行しました。同時に啓蒙パンフレット「シカを救うのはわたしたち」も改訂版を発行しました。会員には 12 月 3 日の会員の集いで配布されます。(末原 義秋)

ハチクマの渡り観察会

日 時 9月22日(木)9:00~13:30
場 所 極楽寺山 極楽寺(鐘楼前東屋付近)
参加者 岩崎 小川 奥田 川崎 小林(勗)
近藤 佐藤(庸) 中道 平田 村上
吉崎 大高下 AR

パークボランティアの会へ入会して3年を過ぎるが、なぜかハチクマの渡りの観察会は今回が初めてです。高出席率を誇っていた(?) 私としては不思議なことです。

近藤さんのハチクマ(和名)についてのレクチャーでは、クマタカに似た姿で蜂を主食とする性質を持つことに由来し、大きさはトビぐらいで見分け方は尾が丸くトビは引っ込んでいる(表紙の写真参照)とのこと。九州の五島列島に集まり、中国へ飛来する。上昇気流に乗って円を描きながら高度を上げていく姿は感動モノらしい。

しかし 待てど、暮らせど、なかなか現れてくれない。渡りの観察は「待ちの一手」「忍の一字」と言うがまさにその通り。10時30分ようやく現れ、一羽だけでしたが、羽根部分もよく見えた。ほんの10秒ぐらいのドラマであった。



その瞬間を待つ

12時すぎにもう一羽が飛来したそうですが私は見る事が出来なかった。面白い光景だと思ったのは、こんなに参加者全員の視線が一点に向かって集中するのは「タカの渡り」観察会ならではの事ではないでしょうか。

(小林 勗)

登山道の町石と植物

降雨の為 公式行事としての町石一斉調査は中止となりましたが、植物マップ作り作業が大詰めを迎えているため、有志のメンバーで実施されました。

10月22日(土) 9:00~16:00
参加者 小方ペア 小林ペア 舛田 村上
当日の降水確率は午前中 30%午後 50%との予報であったので植物マップ作り作業は強行に実施することにした。紅葉谷コースは村上、小方ペアで大元コースは舛田、小林ペアということで植物と町石調査に出発する。

私は大元コースの町石を確認する予定でしたので旧道にて登ることにした。一町は順調に確認することができ、そのまま二町に向ったが自分なりの歩数を計算したらどうも二町は過ぎたようなので三町を捜すことにしたが見つけることができなかった。地図上では四町で登山道と旧道が合流するようになっているので合流するものと思いそのまま登ったがなかなか合流しないというか もう既に四町より上にいるようなのでそのままわずかなテープを頼りに旧道を登る。途中、幕岩のような大きな岩の辺りでテープが途切れる。

なんとかテープを探して頂上に着くが霧がかかっていて場所の確認が出来ない。人の歩けるような所を探して下ると大元コースと駒ヶ林の分岐に出ることができ安堵して大元コースの皆様と調査に合流することが出来た。仁王門で紅葉谷コースの皆様と合流し、今日のメンバー全員で大聖院コースの植物と町石を確認しながら下っていく。

午後からは雨も止み、町石も目視ですがほとんど確認が出来、今日の作業を無事に終えることができました。

私にとっては大奮闘の一日でありました。

(小林 勗)

「みせん」第47号発行予定

発行日 平成24年3月1日
原稿締切 " 1月末日
皆さんの投稿をお待ちしています

環境省主催 極楽寺山

秋のきのこ観察会

日 時 10月23日(日) 13:00~16:00
 場 所 瀬戸内海国立公園 極楽寺山
 主 催 中四国地方環境事務所広島事務所
 講 師 きのこアドバイザー 川上 嘉章
 参加者 環境省 榊 自然保護官 大高下 AR
 足立 岩崎 小方ペア 中道 平田 村上
 公募参加者 31名

当日は前日とは打って変わって天候は晴れ、盛会が予想された。12:30 受付開始、13:00 から開会式。榊自然保護官の主催者挨拶、講師挨拶、大高下 AR の国立公園の説明、生物(動物・植物・菌類)の説明、スケジュール・趣旨および注意説明(特にスズメバチへの対応)がありました。本日の講師である川上さんはきのこアドバイザーの第一人者で、挨拶の中で今日はいろんな種類のキノコを観察し、また食べられるキノコは別にして、毒キノコでも手で触ってもよいがその手で目などに直接さわらないように、ただ今話題の猛毒のカエンダケ(表面が赤色で、手の指のように分岐している円筒形で、3~15 cmの大きさ、ただこの辺りではあまり見られない。)には絶対に素手で触らないようにと言われました。



川上講師(中央)と参加者

13:30 キノコの採取・探索に出発。全員で最初に見つけたのはツチグリ(幼菌は食): 2~3 cmの円形でヒトデのような笠がある。その後三班に分かれて「蛇の池」の周囲を一周するコースへ出発する。私たちの出発は午後で、しかも休日なので朝早くから食用キノコを採取している人の動向を心配しながらの探索行でした。それでも結

構見つかるもので、あちこちから「アッタ」「カワイイ」の声が上がる。参加者全員がこんなに必死になって行動した催しは久しぶりでした。15:00 集合場所に到着し、ビニールシートの上に班ごとに採取したキノコを並べ、川上さんに解説や食毒判定をしていただいた。採取できたのはキノコ46種・属(食可20、非食18、毒8)、粘菌1種、トリュフの仲間1種でした。キノコのスッポンタケ(食可:レースがない)は、会誌「みせん」によく登場するウスキキヌガサタケの仲間とのことでした。



キノコの解説・食毒判定

私は粘菌の実物を初めて見て、ある人達のエピソードを思い出しました。昭和14年昭和天皇が和歌山に行幸された際、南方熊楠が「キャラメル」の空き箱に粘菌を入れてさし上げたところ、陛下は「南方らしいのう」と言われたそうです。ちなみにお二人とも粘菌の研究者でした。16:00 全員無事故で解散。最後に川上さんが食べられるキノコをお持ち帰りくださいとのことでしたが、手を上げたのは女性だけでした。

晩秋の楽しい1日でした。

(平田 広三郎)

ここでキヌガサタケの食べ方を紹介します。

「食用にするキヌガサタケは中国名:竹蓀(チュウスン)と言い、竹林に自生するレース状の笠と筒状の柄を持つ乾燥品で、中国四川省・貴州省の特産です。悪臭があるので流水にさらしてから熱湯で茹でて臭いを抜き、スープの浮き実、蒸し物などに用います。」

来年は地元産をどなたかが賞味され、感想を聞きたいものです。

引用文献 「料理材料の基礎知識」
 大阪あべの 辻調理師専門学校編
 新潮文庫 平成元年

宮島二流記 (その10)

平田 広三郎

Q10:「平 清盛はなぜ今の位置に厳島神社を建てたのでしょうか？」

本題のきっかけは、清盛の出生の秘密とそのことに関わって清盛の内に秘めた企みが読みとれるからです。

A10:「厳島神主・前安芸守佐伯景弘の存在があったからです。」

清盛の出生(1118~1181年)については、「平家物語(14世紀以前に成立?)」などで、母は祇園女御で白河法皇(1053~1129)のご落胤だと述べています。ところが、大正初年に滋賀県の胡宮(このみや)神社に伝わる「仏舎利相承次第(1235年)」が発見され、その中で祇園女御は姉妹二人ながら白河法皇の寵愛を受けており、妹女御が上皇の胤(たね)を宿したまま父忠盛と再婚、生まれた子は忠盛の子となし清盛と名乗ったので「宮号」がつけられなかったと、清盛の母(妹女御)は早世したので、姉の祇園女御が育てたとあります。従って妹女御が母であることはほぼ間違いのないところですが、ご落胤説については肯定・否定する説(主に宮廷社会における清盛の出世のスピードの評価次第)がありますが、本稿ではご落胤説を進めていきます。

一方、清盛と厳島との関係のみをみますと、1151年安芸守を受領(ずりょう)、1160年厳島に詣でる。同年に中納言即ち公卿(くぎょう)となり、家政機関として政所が設けることができますが、そこには掃部允(かもんじょう)景弘(1162年任命され、後の佐伯景弘)が仕えていました。1164年厳島社に納経、1168年2月出家、11月厳島神社造営の申請(鳥居4基含む)その後は略。

清盛は、出家した後、昔の藤原氏のように奈良の春日の神を通じて朝廷を守護するという故事に倣うとともに、平家一門の結束と強化の精神的支柱を得るため、京都の西方に「鎮護国家の祠(ほこら)」を持ちたいと思うようになります。造営の場所については平家一門の支配する瀬戸内海の岡山鹿久居島、宮島、山口県徳山市の笠戸島

の三箇所の中から宮島を選び、位置については厳島の来歴に詳しい景弘が「厳島社は推古天皇の御代(約600年頃)に、宮島の最高峰の弥山の頂上から今の地に遷され、社の南北は弥山の頂上から北への直線上にあり、東西は古代からの祭祀の場所「ばくち尾(標高145m)」からは、貴人たちが信仰する法華経の西方にある極楽浄土の方向にあたり、今の社の位置は非常に神聖な東西南北の交点、ましてや貴方は天皇にもなれた人だ、古来より北(北極星)は天子の御座(おわ)しますところ、北を座して拝めるところです。」ぐらいのことは言ったでしょう。それで清盛は景弘の進言を入れ決断したのだと思われるのです。

1168年11月厳島神社の神主となっていた佐伯景弘は、佐伯鞍職(くらもと:三女神の託宣により三笠の浜に神殿を建てた神主、所の翁とも言う。)の子孫として、朝廷に解状を提出し、厳島神社の造営のことを訴え出ている。景弘の訴えは認められ造営は翌年の4月に始められた。

その後は、清盛自身や幾多の貴族も参拝に訪れ、1174年には御白河法皇(1127~1192)と建春門院が、1180年には高倉上皇(御白河天皇の皇子、母は清盛の妻時子の妹滋子:建春門院)も御幸されている。いずれの訪問者も北に向かって本殿に座り、能舞台で演じられる内侍の舞を楽しんでいます。さぞかし清盛も内心では、ほくそ笑んでいたことでしょう「ああ わしが北におるのじゃのう!」。しかしこの頃の清盛には法皇との軋轢、宗教界との対立、一門の中の不和および東国の源氏の蜂起などの難事がひしひしと押し寄せていたのです。やがて平家は1185年壇の浦の合戦を最後に滅びます。(その4、7)も参照ください。

今回は、Q11「平家物語と宮島とのかかわりはどのようなものだったのでしょうか?」です。

(参考文献)

- ・「古き美しき山河」 森 宏太郎
大阪営林局 昭和46年 (非売品)
- ・「平家納経の世界」 小松 茂美
六興出版 昭和60年
- ・「平 清盛」五味 文彦 吉川弘文館 2011年

入浜定点観測

及び維持管理作業

日 時 10月15日(土) 9:00~14:00
 天 候 くもり
 参加者 小方 小川 奥田 川崎 小林ペア
 佐伯 末原 平田 松田 丸平

【植物調査】

秋も深まってお花はだんだんと少なくなってきました。そんな中でハマゴウの花、とげとげの木に咲く小さな花はカンコノキ、そして、一面に咲いていた鹿の食べないレモンエゴマが目立ちました。実りの秋を迎えて、池の左手には渋柿が実っていましたが、右手の奥には美味しそうな富有柿、その横の石垣の上には、よく実ったミツバアケビが10個以上ありました。(小方 嗣彬)

定点観測実施状況

第4回 8月20日(土)
 第5回 9月17日(土)の入浜定点観測及び維持管理作業は両日とも雨天で中止となりましたが8月27日(土)と9月24日(土)に有志(両日とも4名)で自主観測を行いました。

入浜定点観測

(44号の記事の続きです)

【水生生物】

ハマゴウの若葉がようやく映え始めた5月下旬の入浜ですが(生物季節は少し遅れ気味?)今シーズン最初の環境調査が行われました。

調査日 5月21日(土)
 気温 24.5~26.8 池の水温 19~28

結果概要:トンボ類の成虫は6種が確認されました。最も多かったのはオツネトンボ(60分あたり換算個体数12.00)で池の周りで交尾や産卵が頻繁に見られました。同じく成虫で「越年」するホソミオツネトンボもいました。

これら以外のアオモンイトトンボ、ギンヤンマ、クロスジギンヤンマ、シオカラトンボは、春が来てから羽化する種ですが、いずれもまだ



ハマゴウに産卵中のオツネトンボ

まだ少なめでした。春に限定して見られるクロスジギンヤンマと夏に本番となるギンヤンマが、池の上空で競演(なわばり争い)する様子というのもこの時期ならではの光景でしょう。



沢でとれたヌマエビ

一方、池の中ではヤゴを確認することができませんでした。採れたのは、メダカ、スジエビ、テナガエビのなかま、ヌマエビ(沢)など。池底にたまった腐泥にはアカムシ(ユスリカの幼虫)が生息していました。また水辺にはベンケイガニのなかまの稚ガニが多数みられました。

池の周囲から聞こえる、ハルゼミやキビタキ、シュレーゲルアオガエルにツチガエルといった春らしい鳴き声の共演は、なんとも長閑で心地よかったです。(松田 賢)

お猿の住まい



入浜で拾った、「アカニシ」の貝殻に、ドングリで作った、お猿さんを入れました。

(小方 嗣彬)

紅葉谷公園の清掃・補修

日 時 10月29日(土) 9:00~12:30

参加者 足立 岩崎 釜谷 川崎 五石
小林 島 佐藤 佐 佐藤 庸 末原 田中
中道 平田 平野 平山 舛田 三次
村上 柳瀬 吉崎
榭 自然保護官 大高下 AR

10月29日に曇り空であったが予定通り、紅葉谷公園の清掃補修作業を行った。

今回の作業は「宮島さくら・もみじの会」との共同作業であり、また来年度からのパークボランティア入会希望者の参加もあり多人数での作業となった。

作業の内容は、主な通路の清掃、側溝の清掃及び砂だし、川及び周辺の清掃などである。

午前中で作業を終了し、集まった枯れ木などを運び出したが、トラック2台分になるほど大量の枯れ木を処分し、川の周辺などがすっきりと綺麗になった。

人数が多くて、ほぼ午前中で終了し、解散したが、その後すぐに雨が降り出し、ぎりぎりのタイミングであった。

(吉崎 俊)



トラック 2 台分の枯れ木

樹木名板点検・補修

日 時 10月1日(土) 9:00~12:00

参加者 足立 小川 川崎 小林ペア 坂本
佐藤 佐 渋谷 末原 中道 平田 平野
舛田 村上 柳瀬 西野 自然保護官
宮島棧橋前の広場(藤棚)に集合、参加者

16名。ウグイス道~紅葉谷公園 大元公園~紅葉谷公園の2班に分れて、9時過ぎにスタートしました。

私は 班に入り5名で作業を開始、不慣れな作業で初めは無駄に時間を消費していましたが、仕事の分担がハッキリしてからは順調に進み、ほとんどの時間通りに終わり、 班と12時過ぎに山村茶屋で合流しました。



作業をやって感じたこと

- 1) 名板の取付け位置は出来るだけ低くする。年々樹木は成長し丈も伸びるので、数年すると手が届かなくなる。
- 2) 釘が樹木にめり込むほど打ち付けない。名板を取替えようとして、くぎ抜きで名板が割れてしまった。
- 3) 次回の作業では、名板にも No. を打ち込めば、見落としてバックしたり・チェック漏れを防止でき、時間短縮できる。
- 4) この作業は多人数より5~6人でやるのが効率的だと思います。

(渋谷 精二)

瀬戸内海国立公園

宮島地区パークボランティアの会

事務局 環境省 中国四国地方

環境事務所 広島事務所

(〒730-0012)

広島市中区上八丁堀 6 番 30 号

広島合同庁舎 3 号館 1 階

TEL(082)223-7450・FAX(082)211-0455

宮島詰所

(〒739-0505)廿日市市宮島町 1162-18

(宮島棧橋 2 F)